

古代の感染症流行例

人間環境大学 花井しおり

要 旨

人間と感染症との関係は、1万年以上前に遡るといふ。今回の新型コロナウイルス感染症の流行によって、その関係がいまだに続いていることを、今、改めて感じている。記録に残る日本最初の感染症流行例は、『日本書紀』の崇神天皇条であろう。それに続く『続日本紀』にも、感染症の流行に関する記事が度々見える。細菌・ウイルスの存在も知らず、ワクチンなど望むべくもなかった当時の人々がどのようにして感染症の流行を乗り越えたのか。『続日本紀』の記事をたどってゆくと、治療といえるような術もなかった状況下でも、自然免疫による集団免疫を獲得したと思しく、数年で感染症の流行が終息したと見ることができる。そして、それを繰り返した後、感染症は風土病として定着し、大きな流行を見なくなったという過程が見えてくる。歴史から、このような科学以前の人間と感染症のあり方が浮かび上がってくる。歴史が教えてくれることは、これからも人間と感染症との関係は続くであろうということ、人間は新型コロナウイルス感染症を克服しても、また新たな感染症と向き合わねばならないであろうということである。そして、それとともに、必ずや終息という光を見ることができるといふことである。この歴史を「自然の記憶の覚え書き」として、記憶に留め、物心両面において備えるべきことを古代の感染症流行例は私たちに教えてくれる。

はじめに

令和2年、私たちは突然新型コロナウイルス感染症という未知のウイルスにより、これまでとは全く異なる日常を生きることになった。まさに「想定外」の日々である。しかしながら、人類と感染症との関わりは、1万年以上前に遡るといふ【注1】。このことは、この関わりが現在の新型コロナウイルス感染症の流行に至るまで、1年以上続いているということでもある。この永きにわたる人間と感染症との関係を、人間の力を超える自然の一つとして受け容れるとしたら、寺田寅彦が地震、津浪の発生を歴史的に顧みて指摘した、以下のことばが、これからを示唆するともいえよう【注2】。

しかし困ったことには「自然」は過去の習慣に忠実である。地震や津浪は新思想の流行などには委細かまわず、頑固に、保守的に執念深くやって来るのである。紀元前二十世紀にあったことが紀元二十世紀にも全く同じように行われるのである。

寺田寅彦は、これに「科学の方則とは畢竟『自然の記憶の覚え書き』である。自然ほど伝統に忠実なものはないのである」と続けている。人類の感染症との関係も1年以上続いて来たことから、科学や医学の進歩にかかわらずこれからも続くと考えられる。少なくともそのように受け容れなければならないのではないだろうか、と今置かれている状況が思わせる。

また、イギリスの歴史哲学者のE・H. カーの「歴史は、現在と過去の対話である」という有名なことばもある【注3】。「これから」を考えるために、「これまで」つまり歴史を顧みることは有効であろう。

そこで、本稿では、古代の感染症流行時の状況を史料から見ることにより、新型コロナウイルス感染症以後の「これから」について考えてみたい。

1. 『日本書紀』に見える感染症の流行

日本における最初の感染症流行記事は、『日本書紀』崇神天皇 5(前 93)年の「疫疾」の例である。

五年に、国内に疫疾多く、^{くぬち} 民^{えやみおほ} 死亡者有りて、且大半^{おほみたからまかれるひとあ} ぎなむとす【注4】。

五年に、国内に疫病が多く、民の死亡する者、人口の過半数に及ぶほどであった【注5】。

この「大半」に『新編日本古典文学全集 日本書紀』は「三分の二の意」と注している。この時の疫病は、同 7(前 91)年「十一月の丁卯の朔にして己卯(十三日)」に、神託の通りに大物主大神と倭大国魂を祭ったことにより、

是に疫病始めて息み、国内漸^{くぬちやくやく} に謐り、五^{しづま} 穀^{いつつのたなつものす} 既に成りて、百^{みの} 姓^{おほみたからにぎは} 饒ひぬ。

こうして疫病は初めて途絶え、国内はようやく静穏となり、五穀もすっかり稔って、百姓は豊饒になった。

と記されている。感染症は流行からおよそ 2 年後に終息した。

『日本書紀』に記される次なる感染症の流行は、欽明天皇 13(552)年 10 月の仏教公伝の記事の後に見える。天皇が蘇我稲目に仏像に礼拝させると、

後に、国に疫氣行りて、^{のち} 民^{くに} 夭残^{えやみおこ} を致す。久にして愈^{おほみたからわかに} 多く、治療^{いた} すること能はず。

その後、国に疫病が流行し、人民が若くして死んでいった。疫病はやまず、死者はますます増え治療の手だてがなかった。

という。そして敏達天皇 14(585)年の 2 月の記事には、

(戊子の朔)辛亥(二十四日)に、蘇我大臣患疾す。卜者に問ふ。占者対へて言は

く、「父の時に祭りし^{ほとけ} 仏神の^{みこころ} 心に崇れり」といふ。大臣、即ち子弟^{おほおみ} を遣して、其

占状^{うらかた} を奏す。詔^{まを} して曰はく、「卜者の言に依りて、父の神を祭^{みことり} 祠れ」とのたまふ。

大臣、詔を奉^{うけたまは} りて、石像^{せきざう} を礼拝し、寿命^{らいはい} を延べたまへと乞ふ。是の時に、国に疫疾^{いのちの}

行りて民の死者衆^こ し。

辛亥(二十四日)に蘇我大臣が病気になった。卜者に尋ねたところ、占者は答えて、

「父の時に祭った^た 仏の御心が崇っているのです」と言った。大臣は直ちに子弟を遣わし

て、その占状^{うらかた} を天皇に奏上した。天皇は詔して、「卜者の言葉に従って、父の崇めた^こ 仏を

祭れ」と仰せられた。大臣は詔に従って、弥勒^{みろく} の石像を礼拝し、寿命が延びるように願っ

た。この時、国に疫病がはやって、人民がたくさん死んだ。というように、崇仏派蘇我馬子が病気になる、卜者の言に従って仏神、石像を礼拝したという。この記載の後、疫病が流行し多くの民が亡くなったと記されている。翌3月の条には

三月の丁巳の朔に、物部弓削守屋大連と中臣勝海大夫と、奏して曰さく、「何の故にか肯へて臣が言を用ゐたまはざる。考天皇より陛下に及るまでに、疫疾流行りて、国民絶ゆべし。豈専ら蘇我臣が仏法を興し行ふに由れるに非ずや」とまをす。

三月の丁巳の朔(一日)に、物部弓削守屋大連と中臣勝海大夫とが奏上して、「どうして私どもの意見を用いようとされないのですか。亡き父上の天皇から陛下の御世に至るまで、疫病が流行して、国民は絶え果てようとしています。これはひとえに、蘇我臣が仏法を起して信仰しているからに違いありません」と申しあげた。天皇は詔して、

「もっともなことだ。仏法を止めよ」と仰せられた。

と見える。このように、崇仏派蘇我氏と廃仏派物部氏との論争の如く、疫病の流行が仏教との関わりで記される。この後、天皇の「仏法を断めよ」という詔により、物部守屋は仏塔・仏像・仏殿を焼く。しかし、疫病の流行は終息せず、天皇と蘇我馬子とは疫病にかかってしまう。そして、

又瘡発でて死者、国に充盈てり。其の瘡を患む者が言はく、「身、焼かれ、打たれ、摧かるるが如し」といひて、涕泣ちつつ死る。老も少も窃かに相語らひて曰く、「是、仏像を焼きまつれる罪か」といふ。

また、瘡ができて死ぬ者が国中に満ちあふれた。その瘡を患う者は、「身が焼かれ、打たれ、碎かれるようだ」と言って、泣きながら死んでいった。老人も若者もひそかに語らって、「これは仏像を焼いた罰であろう」と言った。

というように、崇仏・廃仏とに関わって、疫病の記載は続く。仏教は、百濟聖明王によってもたらされた、海外から伝えられたとされるものである。この時の感染症は「瘡」ができることと見えることから天然痘と考えられ、ここで仏教との関わりでいわれているように、それとともに海外から伝来した病と当時把握されていたことが知られる。

2. 『続日本紀』に見える感染症の流行

『日本書紀』に続く歴史書『続日本紀』には、表のように実に多くの疫病、「疫」の記載が見える。これらの「疫」の具体的な病名は不明であるが、『続日本紀』時代、文武天皇元(697)年から桓武天皇の延暦10(791)年までのおよそ100年の間においても、日本は度々感染症に苦

しめられたことが分かる。まず、目を引くのは『続日本紀』における最後の疫病の記載、桓武天皇延暦9(790)年を総括する記述「是年」条の、

是の年の秋・冬京畿の男女の年三十已下の者、悉に豌豆瘡を發し、〈俗裳瘡と云ふ。〉

疾に臥す者多し。その甚だしきは死にぬ。天下の諸国に往々に在り。

である(傍線花井)【注6】。昨今、新型コロナウイルス感染症に対するワクチン接種が期待され、その理由は「集団免疫」の獲得にある。上記傍線部の「京畿の男女年三十已下の者、悉に豌豆瘡を發し」と見えるのは、逆に言えば30歳以上の者は豌豆瘡に罹らなかった。つまりそれ以前の豌豆瘡の流行時に免疫を獲得していたということと考えられる【注7】。延暦9年を遡ること30年余り、京畿、すなわち「山城」「摂津」「和泉」「大和」「河内」の諸国、現在の大阪府、奈良県、京都府南部の地域の「豌豆瘡」の記載が『続日本紀』に見えないことから、京畿の30歳以下の者は豌豆瘡の免疫を持ち得なかったのであろう。

後掲の表『続日本紀』の疫病記事を最初からたどってみると、「疫」が「旧国」、現在の都道府県レベルを超えて広く流行したと推される例が、下記のように8例見える。

- ①文武天皇慶雲2(705)年から同4(707)年
- ②聖武天皇天平7(735)年から同9(737)年
- ③淳仁天皇天平宝字4(760)年
- ④淳仁天皇天平宝字7(763)年
- ⑤光仁天皇宝龜2(771)年
- ⑥光仁天皇宝龜4(773)年から同9(778)年
- ⑦桓武武天皇延暦元(782)年
- ⑧桓武武天皇延暦9(790)年

①の具体的な病名は不明であるが、慶雲2年を総括する「是年」条に「諸国二十、飢ゑ疫しぬ」、同3年の「是年」条に「天下の諸国に疫疾ありて、百姓多く死ぬ」、同4年4月29日条に「天下疫し飢ゑぬ」とあり、この時の疫の流行は三年間断続的に続いたようである。②は、日本史の教科書に記述される藤原家四兄弟の相次ぐ死をもたらしした感染症の流行である。天平7年から8年にかけて大宰府、九州で流行した「疫」は、天平7年8月23日条において、初めて「疫瘡」と病名が記載され、同年の「是歳」条において「豌豆瘡 俗に裳瘡と曰ふ」と記されていることから、この時の「疫」は天然痘と判断される【注8】。この天然痘の流行は、天平9年には、大宰府管内から流行が広がったためであろう。『続日本紀』天平9年1月1日条には、例年見られる元日の節会の記事が見られない。そして、同4月17日条に藤原四兄弟の一人である藤原房前が薨じたと記す。同6月1日条、毎月1日に天皇が大極殿で前月の公文を視るという定例の儀式が、官人たちへの天然痘の流行が広がったために廃されたという記載の後、『続日本紀』の記載は死亡記事が続くようになる。一説によると、この時の日本の総人口は600万から700万人、その25から30%にあたる、150万から200万人が天平7年から9年の天然痘によって亡くなったとされる【注9】。

その後、この大流行により集団免疫が獲得されたためか、天然痘を含むであろう「疫」は、小さな流行を散発的に見せるが、全国的な流行は、『続日本紀』を見る限りにおいてしばらく見られなくなる。次なる全国的な疫の流行は、およそ20年後、③淳仁天皇の天平宝字4(760)年である。

その後も④から⑧のように日本は度々感染症の流行に見舞われたということが、表すなわち『続日本紀』から知られる。

おわりに

細菌・ウイルスの存在など想像すらせず、ワクチンなど望むべくもなかった当時の人々がどのように感染症を乗り越えたのか。当時の対処法は、天平9(737)年6月26日の「太政官符」

【注10】から知ることができる。天平9年公布のものだから疫瘡の療養法や食事についての注意事項というほどの内容である。そこに記されているは、対症療法ではあるものの、当時の医療水準は、およそ250年後、永観2(984)年撰進の『医心方』の段階に匹敵するものであった【注11】。というのとどまらず、現代医学から見ても理に適ったものであるという【注12】。

古代において、感染症の流行はおおよそ数年で自然終息をみていることが、『日本書紀』の崇神天皇の例や『続日本紀』の記事から知られた。そして、それを繰り返した後、大きな流行を見なくなったという過程も見て取れた。また、山本太郎氏は、その後天然痘は、日本で何度も流行するが10世紀以降は一度に多くの犠牲者を出すことはなくなり、一種の風土病として定着したといわれる【注13】

歴史からは、自然の、科学以前の人間と感染症のあり方が浮かび上がってくる。歴史が教えてくれることは、これからも人間と感染症との関係は続くであろうこと、つまりこの度の新型コロナウイルス感染症を克服しえたとしても、また人間は新たな感染症と向き合わねばならないであろうということである。その一方で、感染症の流行には、必ずや収束という光を見ることができるとのことである。この人間と感染症との関係の歴史を「自然の記憶の覚え書き」として、記憶に留め、物心両面において備えておくこと、そのことの大切さというものを古代の感染症流行例は、静かに教えてくれる。

引用文献（本文中に引用箇所が明記されている文献）

- 1) 山本太郎(著)『疫病と人間 新しい感染症の時代をどう生きるか』「プロローグ」3-7頁 朝日新書 2020年
- 2) 寺田寅彦(著)『地震雑感/津浪と人間 寺田寅彦随筆選集』中公文庫、2020年(2011年初版)、59-66頁。なお、「津浪と人間」は昭和8年5月『鉄塔』が初出。
- 3) 『歴史とは何か』岩波新書 2004年(初版1962年)
- 4) 以後『日本書紀』の本文の引用は、小島憲之他(校注・訳)『新編日本古典文学全集 日本書紀』小学館、による。
- 5) 以後『日本書紀』の現代語訳は、注4)前掲書を引用し、斜字とする。
- 6) 以後『続日本紀』の引用は、青木和夫他(校注)『新日本古典文学大系 続日本紀』岩波書店、1989~1998年による。
- 7) 注1)前掲書第一部第1章共存か、あるいは戦いか(26-34頁)の、1846年のデンマーク自治領フェーロー島の麻疹流行の例から考えられる。
- 8) 服部敏良(著)『奈良時代医学の研究』七、疾病論 痘瘡(205-216頁) 科学書院 1980年
- 9) 注1)前掲書第二部第4章日本史のなかの感染症(123-142頁)
- 10) 『新訂増補国史大系 類聚符宣抄』吉川弘文館、昭和1965年、なおわかりやすい口語訳が、青木和夫(著)『日本の歴史3 奈良の都』中央公論社、1987年(初版1965年)に載る。
- 11) 丸山裕美子(著)『日本古代の医療制度』終章『医心方』の世界へ—天平九年の典薬寮勘文と太政官符(211-226頁) 名著刊行会 1998年
- 12) 現役の医師からの書簡によるご教示による。
- 13) 注9)前掲書

謝辞

この度、岡崎大学懇話会から研究費を賜りましたことに、心よりあつくお礼申し上げます。

天皇	元号	年	西暦年月	日	疫病の記事
文武		2	698	3	7 越後の国、疫を申す。医・薬を給ひて救はしむ。
				4	3 近江・紀伊の二国疫す。医・薬を給ひて療さしむ。
		4	700	12	26 大倭国疫す。医・薬を賜ひて救はしむ。
大宝		2	702	2	13 越後の国に疫す。医・薬を遣して療さしむ。
				6	7 上野国に疫す。薬を給ひて救はしむ。
		3	703	3	17 信濃・上野の二国、疫す。薬を給ひて療さしむ。
				5	16 相模国疫す。薬を給ひて救はしむ。
慶雲	元		704	3	29 信濃国疫す。薬を給ひて療さしむ。
				是年	夏、伊賀・伊豆の二国疫す。並に医・薬給ひて療さしむ。
		2	705	是年	諸国二十、飢系疫しぬ。並に医・薬を加へて賑恤せしむ。
		3	706	閏正	5 京畿と、紀伊・因幡・参河・駿河等との国、並に疫す。医・薬を給ひて療さしむ。
				閏正	20 勅して、神祇に禱り祈はしめたまふ。天下の疫病に由りてなり。
				4	29 河内・出雲・備前・安芸・淡路・讃岐・伊予等の国飢系疫しぬ。使を遣はして賑恤せしむ。
				是年	天下の諸国に疫疾ありて、百姓多く死ぬ。始めて土牛を作りて大きに難す。
		4	707	2	6 諸国の疫に因りて、使を遣して大祓せしむ。
				4	29 天下疫し飢系ぬ。詔して賑恤を加へしむ。但し丹波・出雲・石見の三国尤も甚し。幣帛を諸社に奉る。また、京畿と諸国との寺をして読経せしむ。
元明				12	4 伊予国疫す。薬を給ひて療さしむ。
	和銅	元	708	2	11 讃岐国疫す。薬を給ひて療さしむ。
				7	7 但馬・伯耆の二国疫す。薬を給ひて療さしむ。
		2	709	正	21 下総国疫す。薬を給ひて療さしむ。
				6	10 上総・越中の二国疫す。薬を給ひて療さしむ。
				6	27 紀伊国疫す。薬を給ひて療さしむ。
		3	710	2	11 信濃国疫す。薬を給ひて救はしむ。
		4	711	5	7 尾張国疫す。医・薬を給ひて療さしむ。
		5	712	5	4 駿河国疫す。薬を給ひて療さしむ。

天皇	元号	年	西暦年月	日	疫病の記事
元明	和銅	6	713	2	志摩国疫す。薬を給ひて救はしむ。
				4	大和国疫す。薬を給ひて救はしむ。
聖武	天平	7	735	8	勅して、曰はく、「如聞らく「比日、太宰府に疫に死ぬる者多し」ときく。疫氣を救ひ療して、民の命を救はむと思欲ふ」とのたまふ。是を以て、幣を彼部の神祇に奉り、民の為に禱み祈らしむ。また、府の大寺と別国の諸寺とをして、金剛般若経を読ましむ。よりにて使を遣して疫民に賑給し、并せて湯薬を加へしむ。また長門より、以選の諸国の守、若しくは介、専ら齋戒し、道饗祭を祀る。
				8	大宰府言さく、「管内の諸国に疫瘡大きに発り、百姓悉く臥しぬ。今年の間、貢調を停めまく欲す」とまうす。これを許す。
				閏11	詔したまはく、「災変数見れ、疫癘已まぬを以て、天下に大赦せむ。……」
				是歳	年頗る稔らず。夏より冬に至るまで、天下、豌豆瘡 俗に裳瘡と曰ふ。を患む。天くして死ぬる者多し。
		8	736	10	詔して曰はく、「如聞らく、「比年、大宰の管どれる諸国、公事稍く繁く、労役少からず。加以、去の冬疫瘡ありて、男女惣て困み、農事廢るること有りて五穀饒らず」ときく。今年、田祖を免し、民の命を続がしむべし」とのたまふ。
		9	737	4	大宰の管内の諸国、疫瘡時行りて百姓多く死ぬ。詔して、幣を部内の諸社に奉りて祈み禱らしめたまふ。また、貧疫の家を賑恤し、并せて湯薬を給ひて療さしむ。
				5	詔して曰はく、「四月より以来、疫・旱並に行はれ、田苗焦け萎ゆ。是に由りて、山川を祈み禱り、神祇を饗祭らしむれども、効驗を得ず。今に至りて猶苦しむ。朕、不徳を以て実には茲の災を致せり。寛仁を布きて民の患を救はむと思ふ。国郡をして審らかに冤獄を録し、骸を掩ひて肉を埋み、酒を禁めて屠りを断たしむべし。高年の徒と、鰥寡孀独と、京内の僧尼・男女の疾に臥せるとの、自存すること能はぬ者に、量りて賑給を加へよ。また、普く文武の職事以上に物賜へ。天下に大赦す。天平九年五月十九日の昧爽より以前の死罪以下、咸く原免に従へよ。その八虐と、劫賊と、官人の財を受けて法を枉げたと、監臨守主自ら盜せると、監臨する所に盜せると、強盜・窃盜と、故殺人と、私鑄錢と、常赦の免さぬとは、赦の例に在らず」とのたまふ。
				6	朝を廢む。百官の官人疾に患へるを以てなり。
				7	大倭・伊豆・若狭の三国飢え疫める百姓賑給す。
				7	伊賀・駿河・長門の疫み飢えたる民に賑給す。

天皇	元号	年	西暦年月	日	疫病の記事
聖武	天平	9	737	7 23	天下に大赦す。詔して曰く、「比来、疫氣多く発ること有るに縁りて、神祇に祈り祭れども猶可きこと得ず。而るに今、右大臣の身体に勞有りて、瘰癧穩にあらず。朕以て側隱む。天下に大赦してこの病苦を救ふべし。天平九年七月二十二日の昧爽より以前の大時摘み已下、咸く赦除せ。その八虐を犯せると、私鑄錢と、強・窃の二盗と、常赦の免さぬとは、並びに赦の限に在らず」とのたまふ。
				是年春	疫瘡大きに発る。初め筑紫より来りて夏を経て秋に渉る。公卿以下天下の百姓相繼ぎて没死ぬること、勝げて計ふべからず。近き代より以来、これ有らず。
		19	747	4 14	紀伊国疫早す。賑給す。
	天平勝宝	元	749	2 11	石見国疫す。これに賑給す。
淳仁	天平宝字	4	760	3 26	伊勢・近江・美濃・若狭・伯耆・石見・播磨・備中・備後・安芸・周防・紀伊・淡路・讃岐・伊予等の一十五国疫す。これに賑給す。
				4 27	志摩国疫す。これに賑給す。
				5 19	勅したまはく、「如聞らく、「頃者、疫病流行りて黎元飢え苦しむ」ときく。天下の高年、鰥寡孤独、廢疾と疫病に臥す者とは、量りて賑恤を加ふべし。……
		6	762	8 19	陸奥国に疫す。これに賑給す。
		7	763	4 10	壹伎嶋疫す。これに賑給す。
				5 11	伊賀国疫す。これに賑給す。
				6 27	摂津・山背の二国疫す。これに賑給す。
					詔して曰はく、「疫死数多く、水旱時ならず。神火屢至りて、徒に官物を損ふ。此は、国郡司等の国神に恭しからぬ咎なり。また、一旬亢旱して、水无き苦を致し、数日霖雨して、流亡の嗟を抱く。此は、国郡司等、民を使ふに時を失ひ、隄堰を修はぬ過によりてなり。今より已後、若しこの色有らば、目より已上、悉く遷替すべし。久しく居て百姓を勞擾すべからず。更に良材を簡ひて速やかに登用すべし。遂に拙き者は掃田せしめ、賢しき者は官に在らしめ、各、その職を脩めて、務めて民の憂无からしめよ」とのたまふ。
		8	764	3 6	志摩国疫す。これに賑給す。
				4 4	美作国飢えぬ。淡路国疫す。並びにこれに賑給す。

天皇	元号	年	西暦年月	日	疫病の記事	
称徳	天平神護	2	766	5	23	太政官奏して曰さく、「備前国守従五位上石川朝臣名足らが解に、「藤野郡は、地是れ薄瘠にして人尤も貧寒なり。公役を差し科すること、途に触れて念劇なり。山陽の駅路を承けて使命絶えず、西海の遠道を帯びて迎送相尋げり。馬疲れ人苦しみて交存濟せず。加以、頻に早と疫に遭へり。戸纒に三郷にして、人少く役繁し。何ぞ能く支弁せむ。伏して乞はくは、邑久郡香登郷、赤坂郡珂磨・佐伯の三郷、上道郡物理・肩背・沙石の三郷を割きて、藤野郡に隸けむことを」といふ。
	宝亀	元	770	6	23	疫神を京師の四隅と畿内の十堺とに祭らしむ。
				6	24	京師飢疫す。これに賑給す。
				7	18	但馬国疫す。これに賑給す。
光仁	宝亀	2	771	3	5	天下の諸国をして疫神を祭らしむ。
		3	772	6	14	讃岐国疫す。これに賑給す。
		4	773	5	15	伊賀国疫す。医を遣して療しむ。
				7	10	疫神を諸国に祭らしむ。
		5	774	2	3	一七日天下の諸国に読経せしむ。疫氣を攘ふなり。
		6	775	6	22	使を遣して疫神を畿内の諸国に祭らしむ。
				8	22	是の日、疫神を五畿内に祭らしむ。
		8	777	2	28	使を遣して、疫神を五畿内に祭らしむ。
		9	778	3	27	畿内の諸の堺に疫神を祭らしむ。
		11	780	5	12	伊豆国に疫し飢えぬ。これに賑給す。
桓武	延暦	元	782	7	25	詔して曰はく、……今年疫有りて、天殍の徒少なからぬをや。
		4	785	5	27	周防国疫す。これに賑給す。
		9	790	11	27	坂東の諸国は、頻に軍役に属ひ、困りて以て疫し早す。詔して、今年の田租は免したまふ。
						是の年の秋・冬、京畿の男女の年三十巴下の者、悉に豌豆瘡を發し、〈俗に裳瘡と云ふ〉。疾に臥す者多し。その甚だしきは死にぬ。天下の諸国に往々に在り。